

つながる医療 がん治療最前線

国がん・東病院 × 荘内病院医療連携

がんは、自分の正常な細胞の遺伝子に何らかの変化が起きることで発生する病気と考えられています。最も分かりやすい例では、タバコという毒を吸い続けることで、肺の正常な細胞の遺伝子が傷つき肺がんが発生します。がんが主に高齢者の病気であることも同じ理由であり、ヒトは細胞分裂を繰り返しながら年齢を積み重ねていきますが、高齢になるまでには、多くの細胞分裂が必要になるため、遺伝子の複製ミスが起こる確率が増えて、がんが発生しやすくなります。

先日、90歳の患者さんが私の外来を受診しました。かかりつけの医師に胸部レントゲン写真で異常な影を指摘されて、病院の名前が恐い「国立がん研究センター」に「国立がん研究センター」

「90歳まで長生きすれば、前向きに受け止めることが出来るようになります。」

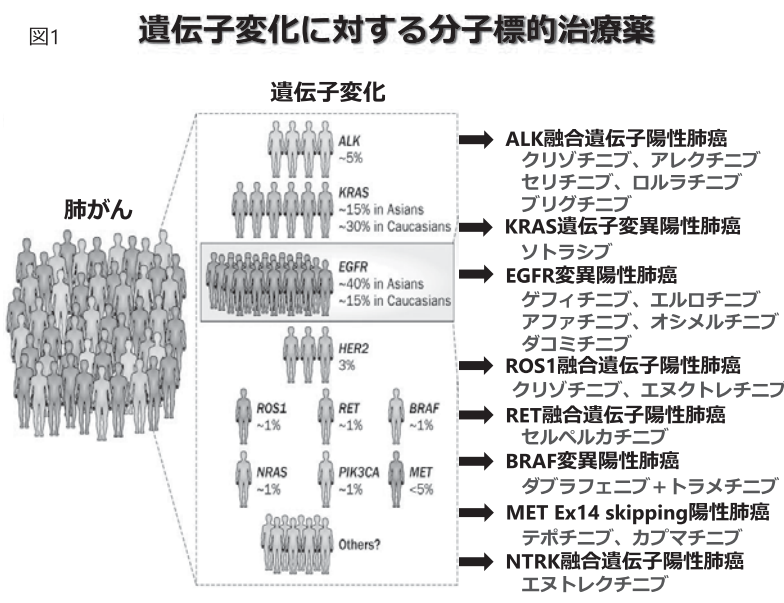
後藤功一（ごとうこういち） 1990年熊本大学医学部卒業、熊本大学医学部第一内科入局。1994年国立がん研究センター東病院呼吸器内科レジデント。2006年熊本大学大学院医学研究科博士課程にて学位取得。2014年国立がん研究センター東病院呼吸器内科長に就任。2022年より副院長も兼任。2017年より長崎大学大学院医療科包括腫瘍学連携講座教授を兼任。2013年に立ち上げたLC-SCRU-Asiaの主



任研究者。

あなたがもし肺がんと診断されたら…

後藤 功一 国立がん研究センター東病院副院長 呼吸器内科長



永遠に生きていくことは不可能だという当たり前のことは、頭の中ではきちんと理解していても、いざ自分が、生命を脅かす病気に罹ると、そう簡単に受け止められるものではないかもしれません。自分だけは特別な存在であり、がんに罹るはずはない、そう錯覚している場合もあるし、無理矢理そう思い込ませて、現実には抵抗しようとしたりします。自分に都合の悪いことには目を伏せてしまおうのは、普通の反応だと思えます。

肺がんは、年間7万人以上が亡くなる難治性の病気です。特に、肺以外の臓器に転移した進行肺がんは、手術を行うことが困難であり、

的治療薬で肺がんの進行を抑えながら、症状を改善し、長生きすることが可能になりました。特にタバコを吸った経験がないのに肺がんになった場合は、この遺伝子変化は高い確率で見つかることも分かっています。

国立がん研究センター東病院では、全国の病院と連携しながら、遺伝子検査の機会を患者さんへ無料で提供するプロジェクト（LC-SCRU-Asiaと呼びます）を2013年から現在も継続しています。あなたがもし肺がんと診断された場合は、分子標的治療薬が使えるかどうか検討するために、必ず遺伝子検査を受けて下さい。前述の90歳の患者さんはEGFR遺伝子という有名な遺伝子に変異を認め、分子標的治療薬を使いながら、92歳になった現在も元気に私の外来に通院しています。副作用が少ないので、高齢者でも治療を受けられるところもこれまでの抗がん剤とは異なる点です。

毎月第4土曜日付に掲載します。
インフォメーション

荘内病院には毎月第一金曜日、通院患者と家族が治療方針などについて国立がん研究センター東病院の専門医と直接相談できる「がん相談外来」が開設される。問い合わせは荘内病院地域医療連携室（電話096-261-5155）へ。